

堀江 薫*, 全鐘勳*, 川森雅仁**, 守屋哲治***
 東北大学大学院国際文化研究科*, NTT基礎研究所**,
 金沢大学教育学部***
 khorie@intcul.tohoku.ac.jp

A contrastive linguistic study of Korean and Japanese adverbial clauses based on Minami's (1974) hierarchical structural model

Summary:

The current study investigates internal structures of Korean adverbial clauses based on a hierarchical structural model of Japanese adverbial clauses proposed by Minami (1974). Korean exhibits a hierarchical organization of adverbial clauses similar to that in Japanese. However, upon close scrutiny, Korean adverbial clauses also exhibit remarkable differences attributable to the differences between the two languages with respect to the morpho-syntactic organization of predicate structure as well as manifestations of finiteness.

1. はじめに

「副詞節(adverbial clause)」は、「補文(complement clause)」、「関係節(relative clause)」とともにいわゆる「従属節(subordinate clause)」のサブタイプを構成し、内部構造、主節との接続様態、表す文法的意味が類型論的にも多様であることが知られている(Foley and Van Valin 1984, Thompson and Longacre 1985)。

韓国語と日本語は、ともに形態的類型論の観点から「膠着型言語」に分類され、その述語構造においても、語幹に付加される使役、受動、相(アスペクト)などの文法形態素相互の境界が明らかであるという膠着語の特徴を示す。また両言語は、内部構造や主節との接続形態において多様な副詞節を有している(Horie 1998a)。

日本語の副詞節(国語学における「従属句」)は、その内部における文法形態素の生起可能性に課せられる制約の強さによって三つの階層を示すという提案が南(1974)によってなされた。この提案は、その後南(1993)において修正発展され、最近では、南モデルにおいて階層性の決定に用いられるパラメタの首尾一貫性に対する批判的検討(尾上1999ab), Foley and Van Valin (1984)を発端とする機能的類型論の観点からの評価(大堀1999, 近刊), さらに南自身による現時点での理論的展望の提示(南1999)などが行われている。

本研究は、日本語と文法構造の著しい類似性を示す韓国語の副詞節に南(1974)の階層モデル(「南モデル」)を適用し、日本語と同様の階層性が韓国語副詞節においても見られるかどうかを分析した。

本論文の構成は以下の通りである。第二節では南モデルの概要およびその意義を一般言語学的観点から述べる。第三節では南モデルを韓国語に適用して得られた分析結果を提示した上で、日本語の副詞節との対照および

理論的考察を行なう。第四節ではまとめと展望を述べる。

2. 南モデルの理論的意義

南(1974)は、現代日本語の副詞節(「従属句」)内部の述語部分にどのような文法形態素(例. 否定辞, 時制辞)が生起可能か、また述語以外の部分に生起する付加詞, 副詞等にどのような生起上の制約が課せられるかを詳細に分析した。この結果南は、文法形態素の副詞節内部(述語部分とそれ以外の部分)への生起可能性に基づいて、日本語の副詞節は、最も生起可能性が限定されているA類から、生起制限が最も緩く主節に最も近い性質を示すC類に至る段階的な階層構造を示すという主張を行った。以下の例文(1)-(3)の下線部はA・B・C類のそれぞれの副詞節の典型例である(1-3は南1974: 115-116より引用)。

- (1) 煙草を飲みながらおしゃべりしている。(A類副詞節)
- (2) 煙草を飲むのでガンが心配だ。(B類)
- (3) 煙草は飲むがガンのことは心配していない。(C類)

南によると、A類副詞節(例文1)はその述語部分に否定のナイや過去のタといった形態素が生起不可能であり、それ自体の主語を通常有することができないといった点で最も生起可能な形態素の範囲が狭い。B類副詞節(例文2)は生起可能な形態素の範囲が広がるが、意思や推量の助動詞(ウ, ヨウ, ダロウ)や、題目のハは通常生起しない。最後にC類副詞節(例文3)は生起可能な形態素の範囲が最も広く、A類, B類に生起できなかった形態素も生起可能となる。A類からC類に至る形態素の段階的生起を示したのが表1, 2である。

表1 日本語副詞節の述語部分に表れる形態素

形態素	A類	B類	C類
使役形	△	○	○
受身形	△	○	○
受給の形	△	○	○
尊敬の形	△	○	○
丁寧の形	×	○	○
打ち消しの形	×	△	△
過去形	×	△	△
意志形	×	×	△
推量形	×	×	△

表2 日本語副詞節の述語部分以外に表れる形態素

形態素	A類	B類	C類
「を」(対格助詞)	○	○	○
「に」(与格助詞)	○	○	○
「へ」(向格助詞)	○	○	○
「と」(共格助詞)	○	○	○
「で」(具格助詞)	○	○	○
「ゆっくり」・「おかぶか」(状態副詞)	○	○	○
「はげしく」(程度副詞)	○	○	○
「が」(主格助詞)	×	○	○
「に」(時格助詞)・「ゆうべ」(時の副詞)	×	○	○
「で」(場所格助詞)	×	○	○
「けっして」(打ち消しの形に呼応する副詞)	×	○	○
「は」(主題の助詞)	×	×	○
「おそらく」・「たぶん」・「まさか」(推量の形に呼応する副詞)	×	×	○

(○は生起可能; ×は生起不可能; △は場合によって生起可能)

南の提案は、西欧言語学でいうところの「定形性の度合い(degree of finiteness)」を捉えようとした試みと見ることが出来る。「定形・非定形(finite vs. non-finite)」という概念は、ヨーロッパ言語において観察される基本的な文法上の対立である。伝統的には、例文(4)の下線部のように時制(テンス)、態(ヴォイス)、人称、数、法(ムード)等の文法カテゴリーを形態論的に示す動詞形を定形動詞と言い、(4')の下線部のようにそのような文法カテゴリーを示さない動詞形を非定形動詞と言う(Koptjevskaja-Tamm 1999: 146)。

- (4) John walks to school every day.
 (4') John likes to walk to school.

ヨーロッパ言語に基づいて作られた「定形性」という概念を、人称、数、ムードによる屈折変化を持たない日本語のような言語においてそのままの形で同定するのは容易ではない。然し、日本語においても「活用」という概念があり、「中止連用形」(何カシ(テ))のような「非定形」に近い述語形式や、「連体形」、「終止形」のような「定形」により近い述語形式が存在している。さらに、それぞれの活用形の間には、三上(1972)が観察したように「普通体を丁寧体に変更することがふさわしいか否か」といった統語的な相違が見られる。例えば、例文(5)の下線部の「中止連用形」は丁寧体に変更不可能であるのに対して、例文(5')の「終止形」は変更可能である。

- (5) 姉が帰宅し(ました)、いきさつが分かりました。
 (5') 姉が帰宅し(まし)たから、いきさつが分かりました。(例文は三上1972: 191を修正)

三上はこのような各活用形間の統語的な相違を「陳述度」という概念で表現した。「陳述度」は「独立文らしさの度合い」と言い換えても大きな差し支えはないものとする。

南モデルは、異なる述語の活用形によって構成される副詞節が、その内部に生起可能な文法形態素の範囲の広狭によって三つの階層に分かれるという形で、三上(1972)の「陳述度」の概念を敷衍、体系化したものと言える。

3. 南モデルの観点から見た韓国語副詞節の階層性

本研究は、南モデルで提案された日本語副詞節の階層性が韓国語においても見られるかどうかを調査した。韓国語は日本語と文法上の多くの類似性を有しており、南モデルにおいて日本語副詞節の階層性の決定に用いられた様々な文法形態素の相当物が、多くの場合ほぼ一対一対応する形で存在しているため、両言語の類似点、相違点に関する詳細な対照が可能となった。以下の表3、表4はその結果を示したものである。両言語間で特に注目すべき相違を示す形態素には下線を付してある。

表3 韓国語の副詞節の述語部分に生起可能な形態素

韓国語			日本語				
形態素	A類	B類	C類	形態素	A類	B類	C類
使役形	○	○	○	使役形	△	○	○
受身形	○	○	○	受身形	△	○	○
受給の形	○	○	○	受給の形	△	○	○
尊敬の接辞	○	○	○	尊敬の形	△	○	○
打ち消しの形式	○	○	○	丁寧の形	×	○	○
過去形	×	△	○	打ち消しの形式	×	△	△
意志形	×	×	○	過去形	×	△	△
推量形	×	×	○	意志形	×	×	△
丁寧の形	×	×	△	推量形	×	×	△

表4 韓国語の副詞節の述語以外の部分に生起可能な形態素

韓国語			日本語				
形態素	A類	B類	C類	形態素	A類	B類	C類
対格助詞	○	○	○	対格助詞	○	○	○
与格助詞	○	○	○	与格助詞	○	○	○
向格助詞	○	○	○	向格助詞	○	○	○
共格助詞	○	○	○	共格助詞	○	○	○
具格助詞	○	○	○	具格助詞	○	○	○
状態副詞	○	○	○	状態副詞	○	○	○
程度副詞	○	○	○	程度副詞	○	○	○
否定副詞	○	○	○	主格助詞	×	○	○
主格助詞	×	○	○	場所格助詞	×	○	○
場所格助詞	×	○	○	時格助詞	×	○	○
時格助詞	×	△	○	時間副詞	×	○	○
時間副詞	×	△	○	否定副詞	×	○	○
主題の助詞	×	△	○	主題の助詞	×	×	○
推量副詞	×	×	○	推量副詞	×	×	○

(○は生起可能; ×は生起不可能; △は場合によって生起可能)

表3、表4からまず見て取れることは、韓国語副詞節においても、日本語と類似した段階的な階層性が認められるということである。これは、韓日両言語間で一般に観察される文法上の類似性を裏付けるものと言える。

然しながら、韓国語副詞節において日本語と同様の三つの階層を認め得るかどうかは必ずしも明らかではない。特に問題となるのがA類、B類の区別である。表3、4では仮にA類、B類という区別を韓国語においても設けたが、特に表3に示す「述語部分に生起可能な形態素」の分布に関しては、日本語と違って韓国語の場合A類とB類の差が殆どない。一方で、表4の「述語以外の部分に生起可能な形態素」に関しては、韓国語においてもA類とB類の間にもある程度の差が認められる。このように、現時点では韓国語副詞節においても日本語と同じA・B・C類の三層の階層を認めるのが妥当か否かという判断が困難であるため、この問題については今後の研究課題としたい。

表3、表4を詳細に検討すると、表中に下線部で示したようないくつかの顕著な相違点があることが分かる。特に相違点が多く見られるのが表3の「述語部分に生起可能な形態素」である。まず、韓国語においては「打ち消しの形式(否定形態素)」およびそれに呼応する「否定副詞(否定対極表現)」の生起が、副詞節の階層性に関わらず自由である点が注目される。例えば、A類副詞節を例にとると、両言語の間には以下のような対照が見られる。

(6) *kutul-un, [centhye cha-lul*
 彼ら-主題 全然(否定副詞) お茶-対格
masi-ci anh-umyense],
 飲む(語幹)-打ち消し-連結接辞(同時性)
iyaki-lul hay-ss-ta.
 話-対格 する(語幹)-過去-終結語尾
 (彼らは、全然お茶を飲まず、話をした。)

(6') * 彼らは、[全然 お茶を飲まない
 否定副詞 打ち消し
 ながら]、話している。
 接続助詞(持続)

韓国語の否定形態素は例文(6)に示すようにA類副詞節内部にも生起可能であるのに対して、日本語の否定形態素はA類副詞節には通常生起できない。否定副詞の生起、非生起もこれに相関した現象である。この対照は、両言語の述語構造の相違と深く関わっている。日本語の場合、副詞節を構成する活用形(連用中止形、仮定形、連体形、終止形)は「独立文らしさの度合い」即ち三上(1972)のいう「陳述度」が異なっており、例文(6')の連用中止形のように陳述度の低い活用形によって構成される副詞節には、独立文に生起可能な形態素(例、否定形態素)の範囲が制限される、という現象が見られる。一方韓国語は日本語の「活用」とはかなり異なる述語の形態変化を示す。韓国語の場合、接続の基本は述語の語幹であり、語幹が直接、あるいは名詞化接辞や連体形接辞、終止形接辞を介して「連結接辞」に結びつき、副詞節を構成する。このため、日本語のような活用形による陳述度の高低という現象は見られず、それに伴った否定形態素の生起、非生起も見られないのだと考えられる。

また、表3にある「意志形、推量形」の生起も両言語間で異なる。韓国語においては、「意志、推量」の両方の文法的意味を表す「先語末語尾」と呼ばれる接辞-keyss-があり、これは例文(7)のような条件副詞節中にも生起可能である。これに対して、現代日本語においては、「意志」「推量」の助動詞が「ウ、ヨウ」、「ダロウ」と分化しているが、いずれも、引用の補文化辞「ト」の中に埋め込まない限り、そのままの形では副詞節内部に生起しにくい。例文(7')はこの制限を示している。

(7) [*tangsin-i kulehkey ha-keyss-*
 あなた-主格 そう する(語幹)-意志-
umyen], susulo chaykim-ul
 連結接辞(条件) 自分で 責任-対格
cy-ela.
 取る(語幹)-終結語尾(命令)
 (あなたがそうしようとするなら、自分で責任を取りなさい。)

(7) * [あなたがそうしよう なら]、
 意志 接続助詞(条件)

自分で責任を取りなさい。
 この対照は、両言語の「意志、推量形」の形態統語論的位置づけと深く関わっている。韓国語の-keyss-は、「先語末語尾」という名称が示すように、決して文末にそれ自体で生起することがない要素である。逆に文末でない限り、副詞節内部の非終端の位置に生起可能なのだと考えられる。日本語の「意志、推量」の助動詞の場合は、これと対照的に文末に生起する強い傾向を持ち、非文末の位置である従属節内部には生起しにくい。

逆に韓国語の方が生起制限の厳しい形態素もある。それは「丁寧さ(聞き手に対する敬意)を表す形態素」である。例文(8)と(8')を参照されたい。

(8) * [*il-ul kkuthnay-pnita-ko],*
 仕事-対格 終える(語幹)-丁寧-連結接辞(継起)
pakk-ey naka-ss-upnita.
 外-向格 出る(語幹)-過去-終結語尾(丁寧)
 (仕事を終えまして、外へ出ました。)

(8') [仕事を終えまして]、外へ出ました。

丁寧 継起

Horie(1998ab, 近刊), Horie and Sassa (近刊)で指摘したように、韓国語の文法が日本語と大きく異なる点の一つに「終止形、連体形の区別の厳密さ」の度合いがある。韓国語の「丁寧」を表す接辞-(u)pnitaは厳密な意味での「終止形」である。このため-(u)pnitaは(8)のような副詞節を含めた従属節内部には原則的に生起不可能である(例外は引用の補文化辞-koおよびC類副詞節を構成する連結接辞-manの直前の位置である)。また-(u)pnitaは「連体形」にはなり得ないため、(9)のような連体修飾節には生起不可能である。

(9) [*ecey tuly-ess-(*upni)-*
 昨日 差し上げる-過去-丁寧(上称)
ten] saywu-num pelsse
 過去・連体 えび-題目 もう
tusy-ess-upni-kka.

召し上がる-過去-丁寧(上称)-疑問

(きのうさし上げましたえびは、もうお召し上がりになりましたか。)

これに対して、日本語の丁寧助動詞「ます(です)」は文末(「終止形」の生起位置)に生起する傾向が強いものの、文全体の丁寧さを高めると(8')のような副詞節や(9')のような連体修飾節の内部(「連体形」の生起位置)にも生起可能となる。

(9') [きのうさし上げました]えびは、もうお召し上がりになりましたか。

以上指摘してきたような韓日両語の相違は、両言語の述語構造の本質的な相違を反映しており、ともに「膠着型言語」と称される韓日両語の「膠着度」(柴谷1984, 塚本1995)の相違といった言語の全体的な構造上の特徴と深く関わっているものと考えられる。

4. おわりに

本論文は、南(1974)が提案した日本語副詞節(従属句)の階層モデルに基づいて、韓国語の副詞節においても類似した階層性が見られるかどうかを調査した。その結果、韓国語副詞節においても、その内部における形態素の生起分布の可能性に関して、日本語と類似した段階的な階層性が観察された。同時に、両言語の間には、特に述語部分に生起する形態素に関していくつかの興味深い相違点が観察された。このことは、類似性が強調される傾向のある両言語の間には、特に述語構造に関してかなり明瞭な相違があることを示唆している。

今後は、尾上(1999ab)や大堀(1999, 近刊)といった、南モデルの意義を新たな観点から問い直す最近の研究をも積極的に参照しながら、韓国語副詞節の階層性および日本語副詞節との相違点の本質を、対照言語学的、類型論的観点からさらに考究していきたいと考える。

謝辞

本研究は第一著者(堀江)に対する平成11年度文部省科学研究費基盤研究(C)(課題番号 10610522)および平成11年度東北大学総長裁量経費の援助を一部受けて行われています。

参考文献

- Foley, William and Robert Van Valin. 1984. *Functional syntax and universal grammar*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Horie, Kaoru. 1998a. Functional duality of case-marking particles in Japanese and its implications for grammaticalization: a contrastive study with Korean. In: Silva David, (ed.), *Japanese/Korean linguistics* 8. Stanford: Center for the Study of Language and Information. 147-159.
- . 1998b. 「コミュニケーションにおける言語的・文化的要因－日韓対照言語学の観点から－」『日本語学』17(11), 118-127.
- . 近刊. 「膠着語における文法化の特徴に関する認知言語学的考察：日本語と韓国語を対象に」(タイトル未定の論文集) 東京：ひつじ書房
- Horie, Kaoru. and Yuko Sassa. 近刊. From place to space to discourse: a contrastive linguistic analysis of Japanese *tokoro* and Korean *tey*. In: Nakayama, Mineharu and Charles J. Quinn (eds.), *Japanese/Korean linguistics* 9. Stanford: Center for the Study of Language and Information.
- Koptjevskaja-Tamm, Maria. 1999. Finiteness. In: Brown, Keith and Jim Miller, (eds.), *Concise encyclopedia of grammatical categories*. Oxford: Pergamon. 146-149.
- 三上章. 1972. 『現代語法序説』東京：くろしお出版.
- 南不二男. 1974. 『現代日本語の構造』東京：大修館.
- . 1993. 『現代日本語文法の輪郭』東京：大修館.
- . 1999. 「階層的構造観－その問題点と展望－」『言語』28.11: 88-94.

- 大堀寿夫. 1999. 「類型論から見た文構造の階層性－南モデルとRRGの接統理論－」『言語』28.11:103-109.
- . 近刊. 「言語的知識としての構文－復文の類型論に向けて－」坂原茂(編)『認知言語学の発展』東京：ひつじ書房
- 尾上圭介. 1999a. 「南モデルの内部構造」『言語』28.11:95-102.
- . 1999b. 「南モデルの学史的意義」『言語』28.12: 78-83.
- 柴谷方良. 1984. 「膠着語とは何か」『研究資料日本文法5 助辞編(1)』東京：明治書院. 34-52.
- Thompson, Sandra A. Thompson and Robert E. Longacre. 1985. Adverbial clauses. In: Shopen, Timothy (ed.), *Language typology and syntactic description*. Vol. 2: *Complex constructions*. Cambridge: Cambridge University Press. 171-234.
- 塚本秀樹. 1995. 「膠着言語と複合構造－特に日本語と朝鮮語の場合－」仁田義雄(編)『復文の研究(上)』東京：くろしお出版. 225-246.